



整備された鶴岡八幡宮の段葛
 — 第 274 回史跡めぐり（鎌倉市）で探訪 —

郷土らがさき

第 137 号

発行 平成 28 年 9 月 1 日
 発行所 茅ヶ崎郷土会
 会長 青木昭三
 編集責任 平野文明

高遠の石工

源 邦 章

高遠の石工……………	1
熱海の湯舟で運ばれた物語	
柳島から津久井へ……………	3
茅ヶ崎かるた……………	5
下寺尾官衙遺跡第二回学習会参加記……………	6

一、はじめに

茅ヶ崎市内高田の大山道に沿って熊野神社があります。その境内に二基の手洗石があります。その一つ寛延四年（一七五二）銘のものに、この手洗石を作った石工の名が「信州高遠城下藤澤郷／石工守屋喜八」と彫られています。信州高遠の石工が、ここ茅ヶ崎の手洗石を作った、もちろん江戸時代のこと、現代のように交通が発達していない時代にどの様にして作ったのであろうか。非常に興味を持っていました。一方私は神奈川県文化財協会の会員として登録していましたが、その機関誌『かながわ文化財』第一一一号に掲載の澤田五十二氏「相模における高遠石工の石造物」という論文に接し、更に郷土会の倉庫に『高遠町史』『高遠の石仏』（高遠町誌編纂委員会）および『野だちの石造物』（厚木市文化財報告書第十三集）等の資料がありましたので、これらを参考にして、ここで高遠の石工について書いてみました。

二、高遠の石工

（一）高遠藩の財政

元禄三年（一六九〇）高遠藩は松代藩真田氏による検地が行われた結果、三万九千石余の石高が計上されました。翌年高遠藩は摂津富田林から内藤氏が三万三千石で就封したが、残りの六千石余は幕府領として引き上げられました。表向きの石高と実際の石高が

同じであることが、高遠藩が幕末まで苦しい財政を強いられた原因でした。

(二) 高遠藩の出稼ぎ奨励

財政苦しい高遠藩は、領内の耕地の分散を禁じ次・三男や山峡の農民に植付け・収穫期以外の期間に出稼ぎを奨励しました。当初は組単位で出稼ぎに行き、農繁期には帰藩させていきましたが、徐々に長期間の出稼ぎや時・所によつては永住するようになっていきました。高遠藩はこの出稼ぎ人に対して運用金(税金)を取っており、その意味からも出稼ぎを奨励していました。

(三) 高遠藩に石工が輩出した要因 『高遠の石仏』より

① 高遠藩でも藤澤郷・入野谷郷は山間地で地味が痩せていて農業だけでは生活が出来ませんでした。(高田の熊野神社の手洗石は藤澤郷の石工の作です。)

② 藤澤地区等は通称高遠石・青石といった石の産地。

③ 採石・石積み等は道具に金がかからない。

④ 石工作業は日当が高い。

⑤ 江戸時代も中期以後は諸種の講が作られ、社寺の参拝も盛んになり石造物の造立が多くなりました。

⑥ 高遠藩は石工の出稼ぎを奨励していた・・・運上金が狙い

⑦ 藤澤郷等は村内に石工が多く、年少者も自然に後継者となつていった。立派な石工になることは、生計が立つかどうかの命懸けの仕事でした。

三、高遠石工の進出分布

① 高遠藩は信濃の国にあり、当初は国内が中心でしたが、次いで甲



斐の国、そして次第に関東・東海・中部などへと広がって行ききました。

② 文久二年(一八六二) 高遠領藤澤郷・入野谷郷出稼ぎ数

信濃 一二九名 上野 四五名 甲斐 九七名
武蔵 一〇名 美濃 三一名 相模 一四名

地元信濃と甲斐は距離が近いだけあつて数が多い。そして入野谷郷の石工は甲斐の国が多く、藤澤郷は相模・甲斐・上野が多い、と言われています。

③ ここで注目すべきは、高遠の石工は高遠領内ではほとんど無名で、在銘のものはずか三基のみです。

④ 相模国での「相模における高遠石工の石造物」依ると高遠石造物の数は五六基(しかしながらここに茅ヶ崎の一基は含まれていない。)ですが、他の領国の数は現在はっきりわかりません。

四、相模における高遠石工による石造物

以下の数値は『かながわ文化財』第一一一号所収の「相模における高遠石工の石造物」から引用しました。

(一) 調査した石造物の全体像・・・判明した数五六基

① 市町村別の分布状況

伊勢原市 二基 相模原市 九基 厚木市 八基
海老名市 五基 平塚市 四基 南足柄市 三基
清川村 三基 その他 一二基 合計 五六基

② 石造物の種類別

地藏菩薩 一〇基 宝篋印塔 一基 題目塔 五基
萬霊塔 五基 手洗石 四基 墓碑石碑 六基
その他 一五基(石灯籠・廻国供養塔・観音各二基)

③ 年代別にみた造立数

一七〇一〜一七二五(二五年間) 七基
一七二六〜一七五〇(同) 八基
一七五一〜一七七五(同) 一五基
一七七六〜一八〇〇(同) 一七基

一八〇一〜一八七五（七五年間） 七基
不明 二基

(二) 相模国での高遠石工の活躍

①高遠町から相模国への出稼ぎは、元禄の時代から幕末までおよそ一六〇年間ほど続きました。

②初期の頃は相模国の村内の需要に応じて様々な生活用具を作っていました。特に農家では石臼が必需品で、その需要が高かったと言います。

③今回調査の高遠石工は四一名（五六基）を数えましたが、実際には銘を残さなかった石工、石切りのみの者などでこの何十倍もの数の人が出稼ぎに来たと思われれます。

(三) 高遠石工の終焉

高遠石工の出稼ぎは江戸時代の後期から減少し始め、幕末頃には殆ど見られなくなりました。その主な要因は、全国的に養蚕が行われるようになり、高遠も同様に地元での人の需要がたかまり、出稼ぎが必要無くなったこと、及び高遠石工が出稼ぎ地で定着し石工への指導の結果、高遠石工の新たな必要が無くなったこと等があげられます。

五、おわりに

今回高遠の石工について少ないながらも資料を入手しましたので、高田の熊野神社の手洗石の銘文をもとに高遠石工について記しました。勉強するほどに、まだまだ資料が足らず、今後さらに調べて何時の日にか発表したいと思えます。

「これからの郷土会関係の行事 文化祭の展示」

日時 一月五日（土）午前一時〜午後四時

六日（日）午前一〇時〜午後三時三〇分

展示内容 写真展「相模国の修験道の聖地を訪ねて」

熱海の湯舟で運ばれた物語 柳島から津久井へ

原 俊一

『郷土ちがさき』第一三三号に「一片の紙片から」という題で、熱海の温泉が柳島に運ばれ、その温泉が現在の柳島のフランス料理店「ル・ニコ・ア・オーミナミ」の敷地内に残る「あたみ かわらゆ 湯治所 山口屋」という碑になっていると調べることを調べて書いた。

これには続きがあつて、津久井郡三井村（みいむら）の山岸宗左衛門が藤間善左衛門に宛てた手紙が、故藤間善一郎氏の手書き文書「数枚の紙片から 其の一（あたみ 湯治所の事）」に書き取られて残っている。以下引用する。

口 代

肅呈仕候、秋気（ママ）漸次に致増処、御全家様、無事消光に御座候や、次に熱海温泉代価一樽何程位に御座候や、一寸御伺候、但し小生近隣の者、温泉を当春より営業仕、須賀浦より只今直買入居候へ共、御貴君店何程か、安値の御咄に候、小生に聞合せくれとの伝言有之、就ては、明樽（空樽のことか、筆者注記）か少々有之候間、代金の儀相分り候へば、金子持参致し、直ちに買入運搬致度、依て代価成丈御勉強願度、代価確定致し、直ちに御報答至急願度候也

津久井郡三井村

山岸宗左衛門

高座郡柳島村

藤間善左衛門様

右記の資料は年月が不詳なのが残念であるが、熱海からの資料は明治十年（一八七七）五月十日であるから、同じ頃と推定する。津久井郡の当時の温泉宿は「温泉」という一言で言い表された久保沢の清泉亭（八木清楼ともいわれる）がある。馬に乗せて運んだ坂は温



④温泉坂、⑥清泉亭
④から下に伸びるグレーの線は市場があったところ。「市場」とは今で言うところの商店街。 (『城山町の地名』(改定版)の18頁第4図「久保沢地区地名配置図」を一部修正・加筆)

のアラク (荒久) の温泉が「古屋清光日誌」(『城山町史』3資料編1近現代 七三頁) に出て来る。

清泉亭と根小屋のアラク温泉を比較すると、清泉亭のあった久保沢は明治時代津久井の中心の一つで東の玄関口といわれ、根小屋より賑わっていたようだ。資料に出て来る根小屋はただ一カ所である。そこで津久井郡三井村の山岸宗左右衛門に温泉の買い付けを依頼した温泉宿の主人であるが、当時としては津久井に熱海から温泉を持つてくるという発想は相当な奇人、起業家である。八木蔦雨(ちようう)氏が著した『久保沢こぼれ話』で清泉亭を起こした八木清七という人のことを「相当な野心家(事業家)」と書いている。それを裏打ちするようなことを『久保沢こぼれ話』に載せている。以下引用する。なお、寝小屋は県立津久井湖城山公園の西にある。「さて、この土地からは、温泉はもとより冷泉さえ湧き出ない。だ

温泉の湯を運んだと言われている。他には根小屋

泉坂といふ地名で残っている。この清泉亭は明治十年、熱海から

がこの清七という人物、事業の鬼ともいうか、あの有名な熱海から温泉の湯を四斗樽に詰めて、駄馬の背によつて運んで来た。個人の事業としては他に類例を見ないといつてもよいものだ。それから温泉宿の標識の旗を高々と掲げ、またうちわへ「温泉」の文字と建物の全景を描いた絵を印刷し、それを久保沢の家毎に配ったりした。現今なら各商店が暑中伺いのうちわを配るなど何のふしぎもないが、八十年も九十年も前にすでにそれをやったということは、商魂もさることながら、その新機軸を出したところなど絶賛に価するものがある。

湯宿の大建築の一番奥まったところに、三十畳か四十畳位の大座敷があり、そこへ舞台を作り、八王子から芸者を呼んで、手踊り・義太夫・手品など、三日間ずつ交代でやって見せた。現今の何々センターともいふべきもので、宿場久保沢の繁昌を反映して、夜となく昼となく弦歌の音が絶えず、久保沢名物「温泉」の名は近郷へ知れ渡っていった。」(同書 温泉坂の由来一三頁)

この清七という人物はいかに商才にたけ、企画面に富んでいたかがわかる。この人物を考えると、小倉の河岸まで相模川で熱海の湯を運び、そこから馬の背に四斗樽を乗せて熱海から馬の背で運んで



★は久保沢の温泉坂と小倉、下線は三井と根小屋の位置

来たと噂を立てることは考えられる。

甲州から流れ着き、八木屋の八木兵輔に取り入り、後に清泉亭を建てた土地を無償でもらい、姓までもらうほどの信頼を得たほどの人物である。その位のことには想像に難くない。よって津久井の温泉宿はこの清泉亭と確定してもよいのではないかと思う。その温泉宿のつくりも「間口六間、奥行五間、二階建という大建築へ、土地の傾斜を利用して百メートルもの間を城郭のごとくひとつづきに、階段伝いにその中を行き来できるように作った」(同書 温泉坂の由来 一三頁)というからたいしたものである。

熱海の湯が海路柳島に運ばれ、「あたみ かわらゆ 湯治所 山口屋」の温泉となり、相模川を溯って、津久井の久保沢で「温泉坂」という地名を残した清泉亭という温泉宿となった。いずれも明治十年代の話である。

参考までに、温泉坂、三井村、小倉、根小屋の位置を示すGoogleマップと、温泉坂・清泉亭・市場(今で言う商店街)の位置がわかる地図(『旧城山町の地名』改定版第4図 久保沢地区地名位置図 一八頁)を載せておく。

なお、高瀬舟で須賀や柳島まで下るのに六時間、上るには半日かかったという。風がない時の上りは舵を操る船頭、陸で綱で舟を上げる船頭、その舟が川岸に当たらないように棒をあてる船頭の三人が乗り込んでいた。積載量は三トンという。

【参考資料】

未刊資料「数枚の紙片から 其の一(あたみ湯治所の事)」

藤間善一郎筆 昭和四〇年一月

『城山町の地名』(改定版) 平成一三年城山町教育委員会

『久保沢こぼれ話』八木蔦雨著 昭和四二年城山町郷土研究会

『城山町史』三資料編―近現代 平成五年城山町

城山町町制五〇年記念『町史の窓』(復刻版)

平成一八年城山町教育委員会(四頁参照)

茅ヶ崎かるた

中島幸子

いまどき正月に、凧あげやこま回し、羽根つきなどをして遊んでいる光景をあまり見たことがない。

家の中でできる「かるたとり」はどうなのだろう。

かるたとりは、老いも若きもひらがなさえ知っていれば遊びの輪の中に入ることが出来る。それにかかるたは、一般的に市販されているのも一様ではなく、目的によって内容が違ふ。

ここでは、「茅ヶ崎かるた」について考え方を書いてみたい。内容が、茅ヶ崎について全般ではなく、また、茅ヶ崎の歴史に限って、他市には関係ないものであるけれども。

かるたの体裁は、百人一首やいろはかるたと同じで、読み札とそれに照らした風景その他の絵札である。手本がなく、だが歴史に忠実に書かなくてはならない。読み札は郷土会の過去の資料を元に、絵札は絵心のある方に一任して完成した。

出来上がったかるたを手にしてみると、よくぞ立派にと感動しきりであった。それなりに粗末には扱えないと思うのだが、かといって大切にしまっておくのは目的ではない。作業をしてきた郷土会が中心になって話し



合った。

まず、小中学校に、活用されるよう届けた。市内の歴史を取り上げていたので、教材になると思うのだが、本箱の片隅に置かれたままだとしたら、残念である。

日ごろ、静かに暮らせている茅ヶ崎は、心のふるさとであり、大切な場所なのである。かるた一枚一枚の絵をながめると、そこには自分がまだ生まれてきていない過去の風景を見ることが出来る。五十枚の絵で足りなかつたら、茅ヶ崎かるたを書き足すくらいの迫力が欲しいではないか。かるたには市民に対して愛情いっぱい、優しさいっぱいのテレパシーを感じる。

「かるた会をしたいのでお願いします。」と毎年お呼びがかかる公民館がある。郷土会の係の者が喜んで行く。かるたの箱と優勝者への賞状を持って。

地元の自治会の役員さんも一緒になって、子供たちを指導してくれる。自治会長も来られて子供たちを励ます。かるたも喜んではずんでいるよう。茅ヶ崎市以外から通って来ている高齢の指導員は「茅ヶ崎の昔は知る由もない。ぜひお願いします。」と熱心に遊んでくれた。三回も訪ねた公民館では、小さな子供たちも「ぼくに読ませてよ」と、すっかりかるた大好きになってくれた。こうして広がっていくのがいい。仲良しご近所の女性の高齢者が、「子供たちは来ませんが、私たちが学びます。」という若いお母さんたちを指導してくれる。

郷土会の係の者は、お呼びを待っているのですよ。

ところで、潮騒の聞こえる海の近くにあるN中学校は、コミュニケーションを取り合おうという祭りをする。かるたとりはみんな輪になって、読み札を順番に読み上げる。コミュニケーションは、いろいろの場面で工夫されていて、地域の人たちもなごやかに一日を楽しんでいるのだという。かるた会の部屋にいくと「ぼく、もう読み札全部おぼえましたよ。」と誇らしげにいう生徒。中学二年生だといっていたのもう一回は会える。校長先生は、地域との交流を深

めつつ教育をしている。頼もしいかぎりである。

下寺尾官衙遺跡群保存・活用

第二回学習会（四月二十四日）に参加して

羽切信夫

茅ヶ崎市発行の「公報茅ヶ崎」（平成二十八年四月十五日号）に「国指定史跡 下寺尾官衙遺跡群保存・活用学習会」のお知らせが掲載されていたので参加しました。茅ヶ崎市教育委員会の主催で、開催日は四月二十四日、会場は「めぐみの幼稚園」（茅ヶ崎市下寺尾）で茅ヶ崎市内外の約八十人が参加し盛会でした。

「下寺尾官衙遺跡群（しもてらおかんがいせきぐん）」は多くの市民や「文化財保存全国協議会」らの熱烈的な運動の結果、平成二十七年三月十日、国の史跡に指定された遺跡で、今から約千三百年前の古代遺跡です。官衙とは役所のこと、古代における相模国高座郡（さがみのくにたかくらぐん）に位置する茅ヶ崎市で発見されたこの遺跡は、高座郡の役所跡であると考えられています。

今回の第二回学習会では、

(一) 下寺尾遺跡群保存・活用について

石井 亨課長（茅ヶ崎市教育委員会社会教育課 史跡・文化資料館整備担当課長）が下寺尾官衙遺跡群保存・活用について、茅ヶ崎市は「遺跡群の本質と価値の理解を深め、地域をはじめとした市民・有識者との意見交換を行うための保存・活用学習会を開催した」と説明しました。

(二) 茅ヶ崎市民話の会が「民話 七堂伽藍」を上演しました。有意義な朗読でした。

(三) 七堂伽藍跡について

大村浩司職員(茅ヶ崎市教育委員会社会教育課)が下寺尾廃寺(七堂伽藍跡)には、今から五十九年前に建てられた「七堂伽藍」碑があると、説明しました。

(四) 史跡の保存と活用について

近藤英夫氏(茅ヶ崎市文化財保護審議会会長・元東海大学教授)から今後の保存と活用は、茅ヶ崎市や神奈川県の行政担当局の努力とともに市民や有識者の今後の努力が必要だ、との説明がありました。

茅ヶ崎市の遺跡群の保存と活用方針

本遺跡群は、茅ヶ崎市はもとより、日本の歴史を語る上で欠くことのできない財産として後世への継承を図り、学校教育や生涯学習に役立てていきます。観光や景観保全にも利用しながら、ひとつづきり・まちづくりを活用していきます。

茅ヶ崎市の取り組み

茅ヶ崎市では史跡の管理を行いながら、地権者のご協力を得て指定地の公有化や追加指定を進めていきます。また、平成二十八年度の史跡の保存・活用についての計画をまとめます。さらに、遺跡群に関する調査研究を継続し、遺跡見学会や講座・学習会などの公開普及事業を行っていきます。

以上の報告及び説明の後、質疑・自由討議が行われ三人が質問意見を行いました。

(羽切) ①県立茅ヶ崎北陵高等学校の移転先について生徒の教育環境も考慮して、神奈川県及び神奈川県教育委員会にもっと積極的に働きかけるべきではないか。

(石井整備担当課長) 関係者の方々と積極的に折衝しているが具体的な内容は今日の段階では発表できない。ご理解をお願いします。

私たち茅ヶ崎市民も「下寺尾官衙遺跡群」を一体的に国指定史跡とし、本格的な保存と整備を実施して、国民共有の歴史的文化遺産として将来にわたり保存、公開できるように文化庁や神奈川県・神奈川県教育委員会などに積極的に働きかけることの必要性を痛感しま

した。

また、県立茅ヶ崎北陵高等学校の移転先については、高校生たちの教育環境整備のため、県や県教育委員会にもっと積極的に働きかけるとともに茅ヶ崎市も積極的に活動することが必要だと感じました。

第二百七十四回史跡めぐり

源 邦章

日時 平成二十八年六月六日(月) 参加者 十四名

コース 相模のものふたち編(No.1)

「源頼朝と御家人たち」(鎌倉市)

茅ヶ崎郷土会の本年の史跡めぐりは「相模のものふたち」と題して、旧相模国内の御家人、その中でも桓武平氏出身で平良文を祖(といわれている)とする坂東八平氏の子孫を巡る計画を立てました。きっかけは昨年の勉強会で会員である小島敏夫氏による「相模のものふたち」の講演でした。詳細なる講演で一気に相模の御家人に関心が高まり、今回の史跡めぐりのシリーズとしました。前述したように相模の御家人の内、平良文(資料によつては異なります)を祖とする一派を抽出しました。即ち三浦半島の三浦氏・和田氏、湯河原の土肥氏、寒川の梶原氏、平塚の岡崎氏・土屋氏等の城跡・館跡を巡る予定です。本日の第一回は御家人の根拠地鎌倉を巡り、鎌倉幕府の所在地三か所や鶴岡八幡宮、鎌倉における御家人の屋敷跡を巡ります。

雨で一週間延びた六月六日(月) 九時に茅ヶ崎駅を出発、鎌倉に向かいました。鎌倉駅東口から歩き始め、最初は三か所の鎌倉幕府跡を巡りました。まず①宇津宮辻子幕府旧蹟です。ここは鎌倉幕府二番目に置かれた場所です。源実朝暗殺後の嘉禄元年(一一二五)執権北条泰時が京都より新將軍を迎えた時、後述の大蔵の地より移された。この地で「御成敗式目」が制定された。十一年後の嘉禎二年(一一三六)に若宮大路に幕府は移りました。②若宮大路幕府旧

蹟は鎌倉幕府滅亡の年建武三年(一二三三)までここにありました。次いで行ったのは④大蔵幕府旧蹟 ③西御門 ⑤東御門でした。ここは源頼朝が鎌倉に幕府を開いた最初の地です。頼朝の館の中に置かれたもので、その範囲は東西約二百七十メートル、南北約二百二十メートルあり、西御門(にしみかど)、東御門(ひがしみかど)がそれぞれの門の所在地でした。

さらに、源頼朝が創建し、和田合戦の折には源実朝が和田方の攻撃から逃れるために籠り、宝治合戦には三浦一族五百余人が討ち死にした⑥法華堂跡を見学、その後⑦源頼朝の墓といわれる墓及び鎌倉幕府草創期の文筆官僚⑧大江広元の墓を巡りました。大江広元は源家滅亡後も北条一族と結びつき、幕府内の重要な一員となりその子孫は毛利元就に続いています。

最後に⑨鶴岡八幡宮に到着しました。当初康平六年(一〇六三)源頼義が京都・石清水八幡宮より勧請して由比に若宮を造営、それを頼朝が鎌倉入り後現在の地に遷座しました。頼朝は大庭景義に命じて社殿の整備をさせました。祭神は応神天皇・比売大神・神功皇后です。ここで昼食を摂り更に八幡宮を見学して帰路に着きました。

これからの郷土会関係の行事

史跡めぐり

第二七六回 相模のものふたち③

九月二十八日(水) 土肥実平と石橋山

第二七七回 相模のものふたち④

十一月二十四日(木) 梶原景時館跡と田村館跡

☆集合時間と場所 午前八時五〇分・茅ヶ崎駅改札口前

郷土民俗歴史勉強会

第三回 日時 十一月十八日(日) 午後一時三〇分から

場所 茅ヶ崎市民ギャラリー会議室A・B(予定)

講師 茅ヶ崎市職員 平山孝通氏「茅ヶ崎の寺子屋」

茅ヶ崎市内史跡巡り

一〇月二日(水) 午前九時 茅ヶ崎駅改札口前集合
奈良時代 香川駅から七堂伽藍跡と高座郡衙跡
十一月二十八日(月) 集合の時間・場所は同じ
鎌倉時代 矢畑本社丘・本社宮・円蔵神明大神・輪光寺
十二月十三日(火) 集合の時間・場所は同じ
鎌倉時代 源氏一族と茅ヶ崎(南湖・浜之郷・下町屋)

月例勉強会 於 高砂コミセン(予定)、午後一時三〇分から

九月二一日(水) 茅ヶ崎の縄文時代② 講師富永富士雄氏

一〇月一六日(日) 茅ヶ崎市の町村制の変遷 講師平山孝通氏

十一月一六日(水) 茅ヶ崎の寺社⑦「平塚八幡宮縁起」

講師平野文明

関係行事の問い合わせ先

源 邦章 (080-6784-3088)

平野文明 (090-8173-8845)

編集を終えて

八月二十二日、台風九号がやってきた。本当ならやって欲しくないものなのだが。終日降り込められて、強雨と強風を気にしながら、この一三七号版下の仕上げに追われた。

近辺の被害はどうだったろうか。少なくとも済んでいることを祈ります。市内の指定文化財の中で、まず気にかかったのは鶴嶺八幡社参道の松並木のことだった。近くにお住まいの方々の心配と、関係の方々のご苦労はいかばかりだったかと思えます。

ささやかな機関誌ですが、編集員は坂井源一、西輝幸、原俊一、誉田雅彦、前田照勝、源邦章、加えて、長年、編集責任を勤められた名和稔雄さんに代わった平野文明です。名和さんお疲れ様でした。といいつつ、皆様方の投稿を期待しております。今後ともよろしくお願いいたします。(平野)